

## エッセイ

### 南岸低気圧・雪の歴史

#### と吾妻鏡

西沢 昭

南岸低気圧とは気象用語です。何が起きるかというところ、春先におきる太平洋側の雪降りです。詳しくは「冬季、本州南岸を低気圧が通過することによる降雪」となり、この言葉は、2月頃になると、テレビの天気予報でよく聞かれるようになります。この本州南岸を通る低気圧は、関東南部で見ますと、低気圧の中心が、八丈島より北を通過するにたいしての場台南からの暖気が入り雨となりませんが、八丈島の少し南を通ると、低気圧の北側に寒気が流れ込み、関東地方で雪になったり、積ったりします。春先の雪ではいろいろな歴史事件が起きています。今回は昭和の春先の雪事件から、時代をさかのぼり、吾妻鏡の時代の気象状態までのことを書きます。

二・二六事件と雪について。昭和十一年二月二六日早朝の事件ですが、事件の場所、東京では二日

前に降った雪が融けずに残りました。二三日の新聞の天気予報では、二三日夕方から夜にかけて雨か雪の予報となっており、当時すでに春の初めに、南方を通過する低気圧は雪を降らせることが分かっています。実際は二四日午前四時過ぎから雪が降り、都心で三五センチの積雪となりました。この年は四日にも雪が降り、三一センチと寒気の年であったようです。更に当日の天気図を見ると、南岸低気圧が解析されており、二六日正午から夕方では、関東南岸は雨や雪の天気となっています。当日は静岡で一〇センチの積雪と新聞にも載っており、再度の積雪であったようです。当然軍隊は雪の想定はしていたものと思います。

桜田門外の変。安政七年三月三日（1860年3月24日）朝、江戸は大雪が積もっていました。春先の南岸低気圧による積雪です。襲撃を準備していた水戸の浪士は雪の想定はしていませんでした。しかし明け方からの雪のため、江戸城に向かう井伊家では刀が濡れないようにカバールをつけていて、これが敗因の一つといわれています。この時代では雪は降ってみな

くは分からなかったようです。元禄にさかのぼると、有名な赤穂浪士の吉良邸討ち入りがやはり南岸低気圧による大雪でした。元禄十五年十二月十四日（1703年1月30日）は春の雪というには半月ほど早いようですが、討ち入りの数日前に雪が積もり、当日は晴れましたが、夜雪の上を歩くために、滑ったり、つま先が冷たく大変だったと思われる。

このように、事件と南岸低気圧は「へー？」という一つの話題を提供してくれます。では時代をさかにさかのぼり、鎌倉時代の吾妻鏡には南岸低気圧による積雪はどのような状態で、そのことから何が分かるのでしょうか。気象の切り口で、吾妻鏡を読み解いてみましょう。

吾妻鏡にはその日の天気が書かれていることがあります。書かれていないときもありますが、まとまった期間が一定な文型で書かれていますので、複数の人が分担して書いているように見えます。ある人が書いた時にはその日の気象を記入したのでしょうか。建仁元年（1202年）から弘長三年（1263年）までの吾妻鏡の記録か

ら、雪の降った記録を気象学の切り口から検討してみました。

鎌倉における雪の記述ですが、現在では、鎌倉で冬に雪が降ることとはほとんどありません。しかし、気候が寒冷化すると、南岸を通る低気圧が八丈島の北側を通過しても、周りが冷たいので、雨とならず雪となります。しかも鎌倉から見ると、より近いところを低気圧が通ることになりますので、雪の量も増えることとなります。吾妻鏡に記録されている「雪が降った」記述はこのような気象原因によるものです。

私は久里浜に二十年通勤していましたが、久里浜では雪が降ったのが三回ほどで、積もったことは一度もありませんでした。このように鎌倉周辺では二月ごろであっても雪の降ることが少ない状況です。朝の二ユースで首都圏が積雪で交通マヒというときでも、鎌倉の沿岸部では積雪はなく、気候の違いを感じました。

さて、時代を鎌倉時代とします。十三世紀の吾妻鏡の書かれた時代では、前記の六十年間で、雪が降ったのは十四回もありました。六十年で十四回、四年に一回ほどの頻

度となります。雪が降る頻度は現在と大きく変わりがなかったようです。しかし、雪が積もった記述

は八回ほどあり、一尺も積もったという記載もあります。この現象を見てみますと、当時の鎌倉の冬は現在の気象庁気温データなどより、大雑把にみると、同じ日本列島の仙台あたりと同じくらいの平均気温のようでした。寒冷な気候です。ですから当時の鎌倉での農作物のでき方は、現在の仙台あたりでの農作物のでき方と考えることができることができます。ですから東北地方太平洋側で起きるヤマセという夏の寒さも、現在の鎌倉よりずっと多かったですと考えられます。冬の気温は現在より三℃以上低く、気候の変動は現在より大きくなりま

であつた気候であつたということが分かります。

寒冷な気候であつたことは、たとえば気象予報士の田家康氏の「気象で読み解く日本の歴史」に示されています。本によると、北京近くにある洞窟内の鍾乳石の分析から、この時代は現在より2〜3度平均気温が低かつたということが分かつているそうです。

ただ異常気象がなかつたわけではありません。正嘉二年（1258年）には火山噴火による世界的な寒冷化異常気象が記録されています。寒冷な気候に異常気象が重なつた正嘉二年以降数年は冷害で作物の出来が悪かつたといわれています。

鎌倉時代というのは、現在より数度低い気候条件であつたため、現在より夏の北東からの冷涼な風を受けやすく、農作物はたびたび不作となつていました。これは異常気象ではなく気象の寒冷化でした。それに加え、正嘉二年の火山噴火により世界的な異常気象となつたと解釈することができそうです。現在、吾妻鏡の夏の台風を解析していますが同様な傾向となりそうです。飢饉は多かつたが、

異常気象と呼べることは無かつたと思われま

今年2月、ハワイで雪が降つたり、6月に気温30℃を超えるメキシコでヒョウが降り、2mも積もつたりしましたが、これは異常気象なのでしようか。異常気象とか天変地異という言葉は、その定義が難しいなと感じています。



2・26 事件の東京朝日新聞記事

(参考文献)

①大谷東平「天気圖と天氣豫報」科学新書1河出書房発行(昭和十六年)

②田家康「気候で読み解く日本の歴史」日本経済新聞社(2013)